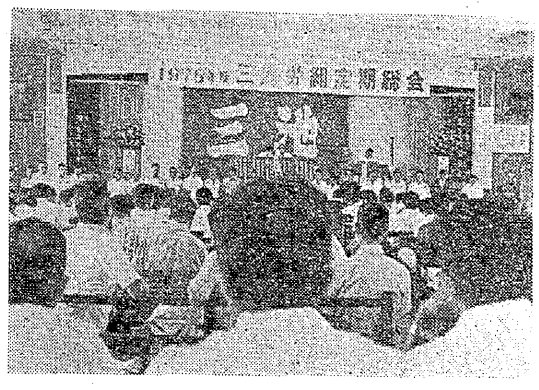
意見出し合い討議を
近づく総会にそなえて


写真は、昨年の総会

新年度（一九七九年度）の、組合の行動方針をきめ、同時に新しい闘争体制を確立するための、三池労組の定期総会は、きたる二十六日午前九時から荒尾市公会堂で開催される。

そのための討議資料のうち、一番大切な一九七九年度行動方針（案）は、中央委員会を通してすでに全組合員に配られている。かならずや、真剣な討議が行われることだろう。

行動方針自体が、「国際独占資本間の無政府的過当競争による……生産過剰をもたらし、……世界資本主義の基本的特徴であるスタグフレーションのはらむ矛盾が表面化しつつある」と指摘するように、資本主義体制の危機がきわだって深刻化している。

そのため労働者は、きびしい情勢のなかにおかれている。そのなかでも、炭鉱労働者をしめつけている情勢はとくにきびしく、命と暮らしを守る闘いを強めることを不可欠にしている。

「八〇年代の労働運動をどう構築するか」が、真剣に討論され始めているのも当然である。

このとき、三池の闘いをどうすすめるか、今こそ率直に意見を出し合うべきで、今年の総会はこれまでになく重要になってきた。

祝いと激励の拍手を
ピアニスト 堺康馬さん門出

▼…大牟田が生んだ新進ピアニスト・堺康馬さんが、きたる八月八日午後六時三十分から、大牟田市民会館でピアノ・リサイタルを開催する。音楽愛好市民は、大きな期待をもって迎えようと、いっしょうけいめいだ。

堺康馬さんといえば、実はレッキとした三池労組員＝堺光夫さん（50歳の払採炭員）の長男で、二十四歳。今春、武蔵野音楽大学の大学院卒業、クロイツァー賞（同大学など、首席卒業者に与えられる賞）を受賞した逸材。この九月中旬から、ドイツ（西）に留学がきまっている。「二年間の条件つきで許可しました」、とは父親の光夫さん。

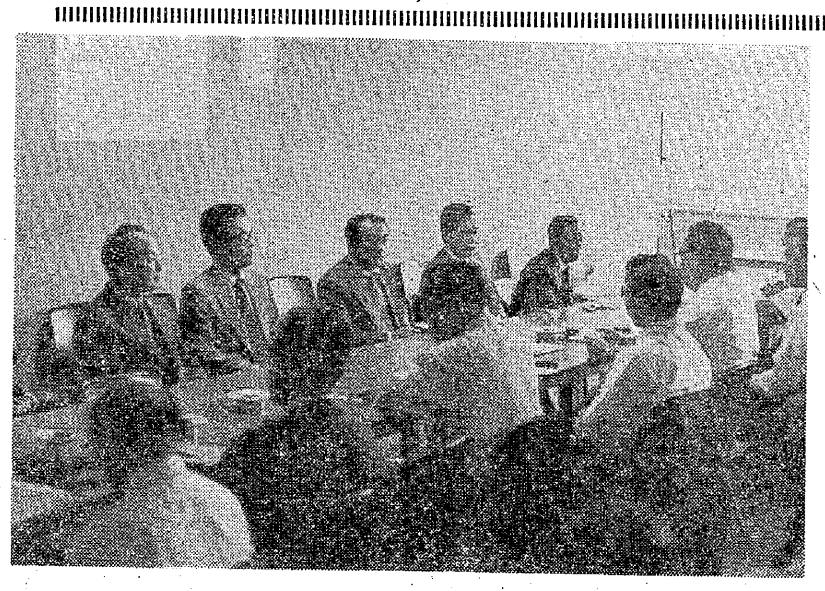
▼…さてリサイタルのプログラムは、バッハの「フランス組曲」（第五番ト長調）、ベートーベンのピアノソナタへ短調OP57「熱情」、スクリャービンの四つの「練習曲」、ルソルグスキーの「展覧会の絵」など。

大牟田地区市民音楽会が主催（後援＝大牟田音楽家協会・大牟田南高校同窓会）し、入場料千円。なかまの間から生れた、一人の稀れなピアニストの輝く門出を祝う意味からも、一人でも多くリサイタルに参加して、暖い拍手を贈ってあげたい。

呼びかけるポスター

炭労、通産省と政策団交
「石炭を見直す」というが
期待できぬ政府の姿勢

わが国の現在のエネルギー情勢からみて、国内における石炭資源の確保と、働く炭鉱労働者の労働条件の向上こそが、何にもまして緊急課題になってきていることを知らぬ者はいまい。炭労は、この問題についてのエネルギー・石炭政策の前進を期し、さきほど通産省との間に団体交渉を行ったが、交渉に見る限り、政府のエネルギー政策が、これまでの姿勢から一歩も出ないことが明らかとなった。炭労として、政策闘争をさらにまわりに広げ、より強めていかなければならない。


対通産省交渉。向う側が通産省の代表たち。

要求十分検討する
高瀬・石炭部長の言明

炭労の、通産省に対する団体交渉は、炭労大会初日の四日に行われた。

交渉は、炭労がかねて提言している石炭政策要求についてすすめられた。

そのなかでまず、通産省側から出席していた高瀬＝エネルギー庁石炭部長は、石炭産業を含め、わが国の全般的なエネルギー情勢について、次のような見方を明らかにした。

石炭部長の言

石油計画の大幅ダウンから、わが国は今後、現在程度の経済成長を期するためには、①省エネルギー、②代替エネルギーの開発導入が必要となる。そこで通産省としては、長期エネルギー需給見通しを早急に見直して、新たな需給計画を策定することになる。

そのなかで国内炭をどうするかはっきりした位置づけを行う。その場合、これまでエネルギー確保には、低廉・安定が第一義とされてきたが、これからは石油の安定確保とともに、石炭、原子力、太陽熱、水力などあらゆるエネルギー源を開発し、導入することが必要となる。

このため、法制化、機構確立、財源確保をはかっていく。

当面①石炭火力の増設、②セメントなど一般産業部門における石炭転換、③海外炭の開発、輸入、④石炭利用技術の開発、⑤国内炭の維持、発展――などの課題を達成しつつ、活用をはかっていく。つまり国内炭～輸入炭を相互補完的に維持していく、ということである。

炭労からの要求については十分検討し、実現可能なものは採択していくことにやぶさかではない。

依然消極的な政府の態度

石炭部長の右の言葉は聞こえはよいが、それにもかかわらず通産省（もちろん政府の）の態度は、これまでより一歩も踏み出そうとしていないことが、炭労の追及によって明らかにされていった。

たとえば、「安定補給金の改訂は、率直にいってむずかしい」（弓削・エネルギー庁炭業課長）「原重油関税収入を財政源にしている石炭特別会計は、今後の石油輸入からみて枠の拡大は期待できず、横すべりがせいぜいである」（高瀬前記石炭部長。以上はいずれも炭労の、「政策春闘資料」から）という、その後の言葉がこれまでとまったく変らない、石炭政策への政府の態度を示している。

炭労として政策闘争をさらに広げ、強めていくことが大切だ。

なかま

港務指導部 飯塚英雄さん

▼…以前は荒尾に住んでいたが、発電所の煤煙公害に被災、気管支ぜんそくをわずらった奥さんのために、玉名へ転居したという愛妻家。職場は港務所の港務係。入社以来三十三年間、車両の修理を続けてきた。組合代議員として活躍中の不屈の仲間。銀髪が美しい。

三池闘争のとき、港務支部の衛生班員として粉骨砕身した。そのころ組合員は、港務支部だけで八百人。それに、支援にかけつけていたオルグ約四百。それが、ホッパー決戦場近くの支部に寝とまり……。

54歳。玉名市繁根木117番地。昭和21年7月8日入社。妻は益子さん。子どもは2人。

飯塚さんの、衛生班員としての主たる役目は、オルグたちの全生活地域の、安全環境の確保だった。便所の掃除や全生活地域にわたる草刈りに清掃。掃除がすんだ便所にはミケゾールを撒を刈った跡地には、全身真っ白になるまで被りながら、BHCを散布。

何しろ、おびただしい戦士たちの使う便所など、着地をとり違える者が少くなく、汚れが避けられなかった。だから、朝もみんながまだ寝息を立てているうちに、その掃除をすませておかなければならなかった。

「疫痢や赤痢の患者が、一人でも出ればおしまい。労働者は闘わずして負け。だから心を配った」、とは飯塚さん。

来年の五月に定年。「三池労組の皆さんのおかげで、人間として大事なことを守れてきたことがうれしい……」。晴れやかな顔で、こう言葉を結んだ。

風化させてはならぬ
禁水爆運動で榎下さん訴える

終始一貫、大牟田に原水爆禁止運動の火がついた初めから、その運動一途に歩いてきた人に、原水爆禁止大牟田協議会の榎下常雄現事務局長がいる。同事務局長は、別項記事にある〝九州縦断キャラバン〟を見送った後で、原水禁運動について次のように語った。

すでに、戦争を知らない子どもが、今年三十四歳になりました。

三十四歳といえば、社会でも産業の職場でも、そろそろ中核としての存在を占めるころです。この戦後を知らない子ども、とうたわれた人びとが、この原水爆運動を今後どのように継承していってくれるか、これは、軍国主義が日に日に強まっているわが国の現状を見ても、どれほど重大なことかわかると思います。

大牟田は、このような平和行進団をもう二十四回も迎え、また送り出しました。

行進は、昭和三十一年からスタートしまして、大牟田はすべての行進に参加しましたが、世の関心は逆に薄れてきています。今こそ戦争と平和の問題について、真剣な討議をまき起こすべきときです。原爆被爆の悲惨さを、決して風化させてはなりません。事実を次代の者に語り継ぐことが、いよいよ大切になってきました。